

韓国における『古事記』研究 (三)

—二〇〇七～二〇〇九年の学術論文を中心に—

田 中 千 晶

韓国における『古事記』の専門的な研究は近代から始められ、特に一九八〇年代以降、本格的に研究が進展し、近年では年間十数本の研究論文が発表されている。『古事記』に関心を寄せる理由として、韓国に関連した記述の存在、神話の類似性などが指摘されている。⁽¹⁾

本稿では、近現代における『古事記』の受容研究の一環として、韓国ではどのような視覚から『古事記』が研究されているのかを探るため、近年の学術論文を紹介する。今回紹介する二〇〇七～二〇〇九年の特徴としては、アメノヒボコ伝承に関する論が増加したことがある。⁽²⁾

二〇〇〇年までの研究動向⁽²⁾及び、二〇〇〇年～二〇〇六年における研究論文リストに関しては、拙稿⁽³⁾を参照されたい。



論文の検索については、R I S S (Research Information Service System)⁽⁴⁾を基本とし、補助的にK S I 学術論文情報⁽⁵⁾とD B j a⁽⁶⁾を用いた。R I S S で検索対象を韓国内学術誌の論文とし、キーワード「古事記」で検索すると、一九六件がヒットした。⁽⁷⁾このうち本稿では、紙幅の都合上、二〇〇七年～二〇〇九年の三年間について紹介する。この期間では三十一件の検索結果が得られたが、題目や本文内に加え、論文のキーワードとして登録されている「古事記」も検索されるため、論文の主旨が『古事記』と異なるものも含まれている(研究年表の12, 22等)。しかし『古事記』が各方面の研究分野からどのように用いられているかを知るためにも、件数に含めることとする。すべての研究論文の内容を紹介することは困難であるため、発行年順に題目等を記した研究年表を挙げ、一部の論文について要旨を掲載した。⁽⁹⁾二〇一〇年以降の論文に関しては、別の機会に譲ることとする。

研究年表 (二〇〇七～二〇〇九年)

※番号に□を付した論文は後に要旨を記載する。

	題目	著者	学術誌名、巻号	発行所	発行年
1	日王家祖上の故地と日本南九州の「韓国」考	李炳銃	地名学論文選	韓国地名学会	二〇〇七・五
2	『古事記』における「天降」—その表記意識について	崔元載	日本語文学37	日本語文学会	二〇〇七・五
3	上代人名における一音節形態素 —古事記・日本書紀における対比的命名法を中心に	崔建植	日本学報71	韓国日本学会	二〇〇七・五
4	九州海岸島嶼と韓国説話の伝播	金和經	東アジア古代学15	東アジア古代学会	二〇〇七・六

31	津田左右吉の単一民族説と古代韓・日民族関係の認識	朴賢淑	東北亜歴史論叢 26	東北亜歴史財団	二〇〇九・十二
30	上代神名の様相―古事記・日本書紀における対比的命名法を中心に	崔建植	東北亜文化研究 21	東北アジア文化学会	二〇〇九・十二
29	『古事記』東方十二道考	李權熙	日本思想 17	韓国日本思想史学会	二〇〇九・十二
28	『古事記』『日本書紀』神代巻に描かれた韓国像―スサノヲとの関係性を中心に―	李昌秀	日本思想 17	韓国日本思想史学会	二〇〇九・十二
27	韓国系ヒメコソ神話の系統研究	成者赫	列上古典研究 30	列上古典研究会	二〇〇九・十二
26	新羅王子天日槍の移住伝説に関する研究	魯成煥	日語日文學研究 68―2	韓国日語日文学会	二〇〇九・八
25	古伝承の多元性について―倭建命伝承を中心に	李權熙	日本思想 16	韓国日本思想史学会	二〇〇九・六
24	『わび』考―『万葉集』『古今集』を中心に	具廷鎬	日本研究 39	韓国外國語大學校日本研究所	二〇〇九・三
23	『古事記』の女鳥王物語の後日談に関する一考察	朴美京	日本文化學報 40	韓国日本文化学会	二〇〇九・二
22	川端康成の天皇観―『たまゆら』を通して	梁蓮子	日本文化研究 29	東アジア日本学会	二〇〇九・一
21	道祖神信仰の源流 古代の道の祭祀と陽物形木製品から ⁽¹⁰⁾	平川南	木簡と文字 2	韓国木簡学会	二〇〇八・十二
20	古事記の文字表現―「請」と「乞」の用法をめぐって―	朴美京	東アジア古代学 18	東アジア古代学会	二〇〇八・十二
19	『古事記』における大年神及びその系譜に関する考察	李昌秀	日語日文學研究 67―2	韓国日語日文学会	二〇〇八・十一
18	上代人名における「中」―「輩行仮名」としての「中」の諸相―	崔建植	東北亜文化研究 16	東北アジア文化学会	二〇〇八・九
17	日本神話の中の古代韓国	魯成煥	東北亜文化研究 16	東北アジア文化学会	二〇〇八・九
16	三種の神器の考察―天孫降臨神話における意義	崔元載	日本語文学 42	日本語文学会	二〇〇八・八
15	日本の〈人種〉競合論理と帝國主義―神話比較方法論の様相を中心に―	全成坤	日本思想 14	韓国日本思想史学会	二〇〇八・六
14	仏教世界観における自己確証	朴正義	日本文化學報 36	韓国日本文化学会	二〇〇八・二
13	イワノヒメ伝承に関する考察―『古事記』のイワノヒメ像について	朴美京	日本文化學報 36	韓国日本文化学会	二〇〇八・二
12	師とその複合語	朴善玉	日本文化研究 25	東アジア日本学会	二〇〇八・一
11	本居宣長における『死と生』 ―18世紀日本および東アジアの〈知の配置〉のまなざしを通して	清水正之	茶山學 13	茶山學術文化財団	二〇〇八
10	『古事記』『日本書紀』に現れた常世	李昌秀	日語日文學研究 63―2	韓国日語日文学会	二〇〇七・十二
9	日本古代文学に現れた新羅人―8世紀の文献を中心に	齋藤麻子	列上古典研究 26	列上古典研究会	二〇〇七・十二
8	〈木こりと仙女〉と日本〈羽衣〉説話の比較研究が抱える問題点と可能性	金歙姫	列上古典研究 26	列上古典研究会	二〇〇七・十二
7	『万葉集』一七九五番歌についての一考察―宇治若郎子について	裴貞烈	韓国日本語文学会學術発表大会論文集 2007―10	韓国日本語文学会	二〇〇七・十
6	『古事記』と天照大神	李昌秀	日本思想 12	韓国日本思想史学会	二〇〇七・六
5	日本のアメノヒボコ説話研究―新羅勢力の日本進出に対する考察を中心に	金和經	人文研究 52	嶺南大学校人文科学研究所	二〇〇七・六

論文要旨 (年表より抜粋)

[5] 金和經「日本のアメノヒボコ説話研究—新羅勢力の日本進出に対する考察を中心に」(『人文研究』52、嶺南大学校人文科学研究所、二〇〇七年六月)

日本に伝えられるアメノヒボコ説話を考察することによって、新羅の人々が日本に進出した様相の一端を究明した。まずアメノヒボコと婚姻をした阿加流比売の誕生について考察した。日光感応と卵生モチーフで形成されている誕生譚が韓国の神話における朱豪の誕生譚と共通していることを確認した上で、阿加流比売が比売基曾神社の主祭神に鎮まつた女神だという点を考慮して、このような女神崇拜は高句麗の柳花から新羅の閔英につながる伝統を受け継いだものと推定した。そしてアメノヒボコ集団は日本の幡磨灘沿岸に上陸して宇頭川流域に着き北上して但馬に定着したとする。それと共に九州の糸島半島にも彼の子孫という人々が住んだことから、新羅の人々の日本移住が一度で終わらず何度も行われたと推察した。またアメノヒボコ集団が但馬に移住した経路は、出雲神話で出雲勢力が日本に進出したそれとは反対になる方向であった。そこで新羅の人々の日本進出は一つの経路だけが利用されたのではなく、色々な経路が利用されたと想定した。したがって、新羅の人々が日本に移住したのは複数回にわたっており、多様な経路で成り立ったと結論づけた。

[6] 李昌秀「『古事記』と天照大御神」(『日本思想』12、韓国日本思想史学会、二〇〇七年六月)

記紀神話におけるアマテラスの登場記事を各段ごとに詳細に分析、比較し、特に『古事記』におけるアマテラスのイメージを探った論。例えば神名の表記では、『日本書紀』の場合、最初の神名に統一性が見られないが、天石屋戸隠もり以降は「天照大神」という表記が定着している。一方『古事記』には一貫して「天照大御神」という二重的敬語表現がみられる。また『日本書紀』での神名及びスサノヲとの誓約記事におけるアマテラスは女神のイメージが現れるが、天石屋戸隠もり以降は、

そのイメージが見られない。一方、『古事記』におけるアマテラスは女神としてのイメージは見いだせない。さらに『日本書紀』とは異なり、『古事記』ではアマテラスが直接的な身体的被害を受けることも描かれていない。これについて論者は、アマテラスの尊厳性を損傷する記述を避けることにより、皇祖神の至高性に細心の配慮が施されたと見なしている。天孫降臨の段においても『日本書紀』での司令神はタカミムスビに焦点を合わせているが、『古事記』ではアマテラスにその重きを置いている。つまり『古事記』におけるアマテラスは、自然神のイメージを脱皮し、すでに至高性を確保した皇祖神としての神格が定着していたとする。

[13] 朴美京「イワノヒメ伝承に関する考察—『古事記』のイワノヒメ像について」(『日本文化學報』36、韓国日本文化学会、二〇〇八年二月)

『古事記』『日本書紀』『万葉集』いずれもイワノヒメを主人公とする伝承を伝える。『古事記』『日本書紀』の伝えるイワノヒメは嫉妬深い皇后として登場しているのに対し、『万葉集』に見えるイワノヒメは天皇への思いを歌ったものであるとされ、従来この『古事記』『日本書紀』と『万葉集』の二つのイワノヒメ像についての考察は多く行われてきた。しかし『古事記』と『日本書紀』の伝えるイワノヒメ像に認められる相違についてはあまり論じられてこず、同時にイワノヒメ像をめぐって正反対の解釈が為されている現状を、まずは指摘する。『古事記』『日本書紀』の二つのイワノヒメ像の比較考察は『古事記』『日本書紀』それぞれのもつ独自の作品世界への理解のために重要な手がかりを与えてくれるものと考え、『古事記』『日本書紀』の伝える二つのイワノヒメ像への比較検討を通し、『古事記』独自の作品世界に迫ろうと試みた。とくに『古事記』『日本書紀』に見えるイワノヒメに関する記事の中で、両者に共通して伝えられている話でもあり、また大きく食い違っている話でもある八田若郎女をめぐる話を中心に考察している。その結果、『古事記』『日本書紀』の編者が、伝説や氏族伝承をそれぞれの編纂意図に合わせて修正し、定着させていることを考え合わせ、諸説共通して従来はこの物語の主人公をイワノヒメとみ、天皇をわき役としか見ていなかった点や、氏族伝承として論じるような視点だけではやはり、この物語を説明しきれない限界があ

る事を指摘した。『古事記』におけるイワノヒメに関わる物語は、従来のように、イワノヒメを主人公とする「嫉妬物語」や「恋物語」ではなく、あくまでも仁徳天皇を主人公とする物語の中の「仁徳天皇の皇后イワノヒメ」に関わる物語として見直されるべきであろうと結論づけた。

〔17〕魯成煥「日本神話の中の古代韓国」(『東北亜文化研究』16、東北アジア文化学会、二〇〇八年九月)

天皇家の成立には朝鮮半島からの渡来人たちが深く関与したとする論。高天の原からの統治者は二度にわたり地上に派遣された。一方がスサノオ神話であり、もう一方がニギの神話である。論者によれば前者はスサノオとオオナムチを崇拝するグループで、新羅から海を渡って出雲に落ち着き、後者はアマテラスとニギを崇拝するグループで、伽耶から海を渡り日向に落ち着いたとする。二つのグループは異なる地方を統治したために当初は対立しなかったが、やがて争い出雲が敗れた。日向グループは出雲を支配し、友好的和解に達する際に出雲グループが強硬な抵抗をしたと考える。神武(日向)とイスケヨリヒメ(出雲)の結婚により、二つのグループが神武の支配下で完全に連合した。彼らの結婚は王の権威の設立を意味したとする日本人の換言は真実ではないかもしれず、むしろ出雲グループと日向グループが新しい力を組み合わせて組織したことを意味するのではないか。それは同時に、伽耶の力が新羅の力を吸収し、日本の皇室を作ったことを意味するのではないかと推測している。

〔19〕李昌秀「『古事記』における大年神及びその系譜に関する考察」(『日語日文学研究』67-2、韓国日語日文学会、二〇〇八年十一月)

大年神は『日本書紀』においてはまったく見られない『古事記』だけの独自の伝承であるため、「記紀神話」の範疇には含まれない非主流神話とされかねない。しかし、大年神及びその系譜を綿密に分析することで、大年神は稲の御霊を中心とした年穀を司る年神の統合というイメージを持ち、その系譜にある神々は耕作から収穫に至る農耕生活における空間的環境と時間的推移を象徴的に表す意味が込められ

ているとした。大年神とは農作業の全過程を一つのサイクルに表象した名前であり、またその系譜は農耕生活に欠かせない山、田、そして暦日の重要性を表し、これを伝えた渡来人たちへの敬意をも込めていたとする。そして農耕的な文脈を基層とする大年神の系譜が大国主神の「国作り神話」と「国譲り神話」との間に位置している理由を以下のように分析する。大国主神による「国作り」の伝承が、国神の統合によって支配領域や政治的な権威の統合を成し遂げたことを示したとすれば、大年神とその系譜は農耕生活を基盤とした社会経済的な神々の総論的な統合を象徴したものとと言える。従って『古事記』には、「国譲り神話」の前に大年神の系譜を配置することにより、政治的な権威と社会経済的な基盤を統合し、安定に完成させた国を天孫に譲ろうとする政治的な意図が込められていた。さらに、大年神の誕生以前には単なる「葦原中国」と呼ばれた国土が「豊葦原千秋長五百秋水穂国」に格上げされたのは、大年神とその系譜の記事が挿入した産物であると付言する。

〔25〕李權熙「古伝承の多元性について―倭建命伝承を中心に」(『日本思想』16、韓国日本思想史学会、二〇〇九年六月)

倭建命の伝承が何時、誰の手によって今の古事記・日本書紀にみるような形に整えられ、新しい伝承として統合・再編されたかは定かではない。ということとは、可能性としていろいろな推定ができるということでもある。倭建命は、大和政権の皇統譜から消されてしまった天皇であった、もしくは権力争いに敗れてしまった皇族將軍の幻影であった、あるいは、日本国内の征服と統一の時期に活躍した古代の英雄だった可能性もあろうとする。現在の人々が倭建命伝承に心を打たれ特別な意味を与えているのは、天皇の世界を日本国全体に広めたという忠実な皇族將軍として活躍する倭建命のつくられた英雄像からではなく、時空を超越して人間の弱さと限界を体験し自分の運命を諦念して死んでいくという、一人の古代人の不遇な生がそこにあるからと推察する。不純な意図によって首尾一貫した「死んだ伝承」よりは、多少は整合に欠け粗悪な古伝承のままでも、古代の様々な可能性を与えてくれる伝承の多元化こそ、古伝承のもつ一番大きな魅力であろうと論ずる。「非合理的」あるいは「歪曲した歴史の創出」として軽視するのではなく、かえってテキスト万能

主義が見逃しかねないテキストの外部の魅力、すなわち、古代の一元化によって埋まってしまうがちのテキストの外部の多様な古代性こそ、古事記・日本書紀を貫通する古伝承の一番の魅力であるということを開いて直している。

[26]魯成煥「新羅王子天日槍の移住伝説に関する研究」(『日語日文学研究』68—2、韓国日語日文学会、二〇〇九年八月)

天日槍の移住行路を追跡した論。(『記紀』と「風土記」の記録をもとに想定できるのは、次のような二つのルートである。一つは(『記紀』)によるもので、難波から近江―若狭を経て但馬に至るルートで、もう一つは「風土記」による、播磨からシサワ―但馬に至るルートである。そして、もつとも説得力のあるのは後者とする。その理由として、天日槍はヒメコソの夫であり、難波から但馬に行くというのは距離上からも合わないのみならず、近江と若狭に天日槍と関連のある伝承と神社は、後代に潤色されて生まれたからとする。しかし(『記紀』)にそうした行路が述べられたのは、その地域を結ぶ一つの文化圏の存在と、さらに息長氏と三宅氏という古代豪族たちの活躍があったからである。両方とも天日槍と密接な深い関係を持つていた。息長氏は天日槍集団と婚姻し、その結果、天日槍の子孫と言われる神功皇后を輩出したし、その反面、三宅氏は難波と近江地域に分布されていた三宅を管理し、自ら天日槍の子孫と名乗った。こうした事情から(『記紀』)に表現されたルートができ、それによって若狭と近江に天日槍と関わる神社と伝承が生じたとする。したがって朝鮮半島から渡って行った天日槍は、まず九州の糸島地域を経て瀬戸内海に入り播磨に至り、そこから北上してシサワに暫く留ってから但馬の出石に移動し、そこで定着して繁栄を成し遂げ、そこを基盤にし、若狭、近江、難波に進出した古代韓国系の移住勢力の象徴的な人物であったとみなした。

[27]成者赫「韓国系ヒメコソ神話の系統研究」(『列上古典研究』30、列上古典研究会、二〇〇九年十二月)

韓国から日本に渡来した神・人物を主人公とした「渡来人」神話伝承の中でも、とくに「ヒメコソ神話」と呼ばれるものに焦点を当て、その性格や系統を分析した

論。また、現地調査資料を取り入れ、文献資料以外にもヒメコソ女神と関連の深い神社や、その来歴に関わる資料からの分析を試みている。「古事記」をはじめとした中央神話テキストでは、ヤマト王権を基盤として形成された神が多く描かれるが、地方神話テキストである「風土記」には、より多様な地域的特徴をもつた神話や、その神話と関連がある神社資料を豊富に見いだすことが出来る。これらの両文献資料を対象とし、また民俗調査資料を合わせて考察し、代表的な渡来伝承である「ヒメコソ神話」の性格と、その系統を次のように要約した。一、「古事記」のアメノヒボコ伝承で、主人公・アメノヒボコの妻とされるヒメコソ女神の渡来を独立的な神話としたとき、ヒメコソ女神は、渡来人の祖とされるアメノヒボコよりも以前に、日本に初めて渡来した韓国の女神であったと考えられる。ヒメコソ女神は、夫であるアメノヒボコとは連動しない形で、その在住民から信仰・崇拜の対象となるとい、独立した神話的人格をもっている。ヒメコソ女神は、新羅系渡来集団がアメノヒボコとは全く別に奉祀する女神であったと推察する。二、各神話テキストにおけるヒメコソ女神の渡来地は、大阪と九州北部の二つに分けることができる。ヒメコソ女神を祀る神社の分布地域も、これと連動するように大阪と九州北部の二つの地域に集中している。三、神話伝承におけるヒメコソ女神は、韓国から日本へと渡来し、上記の二つの地域を中心に文化的先進性をもって活動し、その場所が彼女の神格化に関わった。また、これらの神話に描かれるヒメコソ女神の性格は、1治水技術をもつた水神(『古事記』)、2寄石信仰を背景とする神(『日本書紀』)、3金属の生成、特に製鉄に関わる神(『撰津国風土記』逸文)、4金属の生成、特に製銅に関わる神(『豊前国風土記』逸文)、5機織りの女神(『肥前国風土記』)の5つに分類することができる。結論として、ヒメコソ神話はこのように多様な性格と系統をもつものであり、一元的に理解することが不可能であるとし、したがって、従来一括して考えられてきた渡来人神話伝承は、再度検証する必要があると主張した。

[28]李昌秀「『古事記』『日本書紀』神代巻に描かれた韓国像―スサノヲとの関係性を中心に―」(『日本思想』17、韓国日本思想史学会、二〇〇九年十二月)

『古事記』上巻と『日本書紀』神代巻に描かれている「韓」はどのような意味を

持つのかという問いから発し、両書に記されている「韓」という地名が出てくる記事にはすべて「スサノヲ」という神と直接または間接に繋がっているという共通点を見出し、「スサノヲ」神話伝承の背景を探る。『古事記』の場合は、「スサノヲ」の末裔に当る大年神の系譜に「韓神」があるが、神名だけあり、神話上にどういう役割を果たすのか伝承も伴わず、確かな意味も分からない。しかしこの神と共に登場している神々の名前の分析から、稲作及び農耕生活に深い関連をもつことがわかり、古代朝鮮から日本に渡った渡来系の神と考えた。また「韓神」に関して蓄積された研究成果をもとに、古代日本への大規模な渡来系氏族である秦氏と深い関係をもつことや、平安時代に宮中で祭っていた神であったことが『三代実録』にも記してあることから『古事記』の編纂過程にもある程度関与したとも推察した。一方、『日本書紀』における「韓」は一書にのみ見られるが、すべて「スサノヲ」と直接に関わっていると指摘した。「スサノヲ」は天上から追放され出雲に天降り、ヤマタのヲロチを退治する英雄神になるが、そのとき使った刀を「韓劍」と呼んだのは、古代砂鉄を採取し刀剣を作るなどの製鉄技術を保持した韓国系移住民集団の活躍を反映した表現と考える。そして、「スサノヲ」神話伝承の空間的背景が「新羅」や「韓地」等を起点にしていること、しかもその移動ルートが偶然にも地理的に今の日本海に面した出雲を始め、尾張・吉備・紀伊など西日本地域にわたって分布していることから、所謂渡来人集団と地域の土豪が古代朝鮮半島との人的・物的交流を担当しながら重要な地位を確保していったと考察している。描写されている韓国像は、鉄剣を始めとする製鉄技術の原郷とともに樹木信仰の発祥地であり、樹木の使い方の伝播起点として、さらに金銀などの宝物に富んでいる理想的な異郷と描かれている。つまり、スサノヲは砂鉄の精練と刀剣の製作技術、そして進んだ稲作及び林業の技術と経験といった朝鮮半島の高い文明を保って日本へ渡った古代韓国系の移住民集団によって、ある一時期を定め日本に渡来した豊饒神かつ英雄神としてのイメージをもつ。同時にその伝承は、西日本地域の海人の活躍と移動に伴ってシヤマニズム風の信仰的要素を加えつつ、スサノオ神社と信仰を各地に伝播したことを神話的に描いたもう一つのスサノヲ伝承であると論じた。

¹ 魯成煥「神話学から見た韓国の記紀研究」(『國文學 解釈と教材の研究』51—1 學燈社 二〇〇六年一月)

² 研究動向に関しては注1及び、金祥圭「韓国における日本神話研究の現状」(『古事記年報』46 古事記学会 二〇〇四年一月)を参照した。

³ 田中千晶「韓国における『古事記』研究(一)——二〇〇〇—二〇〇二年の学術論文を中心に」(『水門』25 勉誠出版 二〇一三年一〇月)、同「韓国における『古事記』研究(二)——二〇〇三—二〇〇六年の学術論文を中心に」(『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』50 二〇一四年三月)

⁴ RISSは韓国教育学術情報院によるデータベース。韓国内学術誌論文、海外学術誌論文、学位論文、単行本、学術誌などを検索できる。韓国内の学会及び大学附設の研究機関が発行する学術誌の論文は約三五〇万件、学位論文は約一一四万件が収録されている。(収録数は二〇一三年十二月末基準) <http://www.riss.kr/index.do>

⁵ KSI韓国学術情報(Korean Studies Information, KSI)によるデータベース。韓国国内二二〇〇余の学会及び研究所と著作権契約をしており、学会誌及び研究刊行物に掲載された約九〇万件的論文をPDF化し収録している。 <http://www.papersearch.net/>

⁶ Nuriamedia社が韓国最大の書店・教保書店とともに提供する学術情報データベース。約一七〇万件的論文、一八〇〇種の刊行物を収録(二〇一四年三月基準)。 <http://www.dbpia.co.kr/>

⁷ 二〇一四年十月二十九日現在。漢字「古事記」もハングル表記「고사기」も同数の一九六件である。

⁸ 韓国の学術誌に掲載された日本人研究者の論文を含む。

⁹ 年表には日本人研究者による論文も掲載した。要旨は、原則として韓人名の筆者による論文を選択し、私に翻訳し要約あるいは筆者による要旨を簡略化した。論文名等は適宜日本語に変えた。

¹⁰ 同論文は先に日本の『国立歴史民俗博物館研究報告』第一三集(二〇〇六年十二月)に掲載されている。

“Kojiki” studies in South Korea (3)

— Academic papers from 2007 to 2009 —

TANAKA Chiaki

Abstract : In this article, I introduce the study of “Kojiki” researches in South Korea. I will analyze the academic papers on “Kojiki” after 2000. South Korea has worked on its researches in full scale the 1980's.

The similarity of the myths of Japan and South Korea, and the descriptions of the Korean Peninsula have been discussed there.

要旨：韓国においては、近代に入ってから『古事記』の研究が始められた。朝鮮半島に関する記述の存在、神話の類似性などが研究対象として関心を持つ理由であり、本格的に研究が進展してきたのは1980年代以降である。その研究方法は大きく次の二つに分けることができる。一つは日韓の神話を比較し、日本にいかにか文化的影響を与えたかを解明する研究、今一つは『古事記』『日本書紀』の特殊性をそれぞれのテキストに分離して探る研究である。方法の異なる両者を結び、且つ韓国の『古事記』研究の転機となった研究が、魯成煥『日本神話の研究』（報告社、2002年9月）といえる。本稿ではこの『日本神話の研究』を転換点とみなし、刊行前夜にあたる2000年以降、どのような視覚から『古事記』が研究されているのかについて、韓国内における学術論文を紹介する。